
第七音の休止符

栖里 嘉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第七音の休止符

【Nコード】

N4888Y

【作者名】

栖里 嘉一

【あらすじ】

高梨詩織は休日には街を歩いていた。どこか重たい気持ちを抱えながら。

後ろから掛けられた声は、知った声だったが……。

「開かれしは音のない場所
それは永遠ではない

糸は紹となり
私は魯なれば
志は露でしかない」

糸は複雑に織り上げられ、私は愚かであるので、志なんていうものは儚いものでしかない。……そんな意味らしい。人生の難しさと人間の儚さを表わしているそうだ。

耳の奥まで染み込むような心地よく繰り返される音韻。始めは意味も知らずその音が気に入って、もはや口癖にまでなっていた。高梨詩織はたまの休日にこうして一人で散歩するのが好きだ。風の音を聞きながら、お気に入りの詩を口づさんで、どこへ向かうでもなく外の空気に触れる。世界に溶け合いながらこのときだけは誰も詩織を干渉するものがない。個人でいることを意識する必要もない。

「あれ、こんなところで何やってんの？」

どこか覚えのある声に一瞬びくつと肩が震えた。何ともない顔で振り向くとそこには同じクラスのお調子者がたっていた。ふうと音にはせずに短く息をはく。

「ちよつとね。あなたこそ」

「うん？ 俺もちよつとね」

すました顔で答えをはぐらかすと、彼は詩織の言葉を捕まえて面白そうに笑う。

「それで、何か用？」

「後ろ姿が見えたから」

「それ、声をかける理由になる？」

取りつく島もない詩織に彼は苦笑する。

「あーうん、なんか、ふわふわしててどっかいつちまいそうだったから」

不覚にも照れたように髪をいじる彼を少しかわいいと思ってしまった。

「……大丈夫よ。私、そんなに弱くないもの」

「そうか？ まあ高梨が落ち込んでるようじゃ、お前より成績悪いやつは立つ瀬ないからな」

「それって自分のこと？」

詩織が言つと彼は苦い顔をするので今度は笑ってしまった。それを見て彼は安心したように微笑む。

「笑えるなら問題ないな。じゃ春には同じ大学で」

去っていく背中を見送りながら心は晴れやかだった。想いは音と成って唇からこぼれおちていく。

「しはろとなり、しはろなれど、……風は路を示すだろう」

大好きな詩を勝手に変えてしまった後ろめたさと自分の物だけにしたような優越感。紅潮する頬を冷たい風が撫でていく。詩織はどこへいっても自分は大丈夫だと、確信に近い思いを抱いていた。

音が聞こえる、鮮やかな音色が。はばたくことに疲れたら羽を休めればいい。耳に聞こえない音がその先を導いてくれる。留まることは許さないけれど、休息を与えてくれる。

緩やかな旋律が風にのり、その細く頼りない足はしっかりと前を向いていた。枯れ木が立ち並ぶ通り道を照らす陽が、詩織には眩しくて愛しかった。

（後書き）

お読みいただきありがとうございました！
あまり時間はかけていないけど楽しく書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4888y/>

第七音の休止符

2011年11月17日19時17分発行